

小川政弘作「日本を愛した神の人

スティーヴン・メカフ物語」

《第3部 生涯の伴侶と共に》

アナウンサー 中国での捕虜生活から解放されたスティーヴン・メカフ牧師は、彼の後半生を、キリストの愛を伝える宣教師としてかつての敵国、日本で、過ごすことになりました。来日した1952年から1990年にイギリスに帰国するまでの38年の間、日本を愛し、日本に半生をささげた伝道の生涯を、彼の口から語っていただきましょう。では、小川政弘作、ノンフィクション「日本を愛した神の人 スティーヴン・メカフ物語」第3部「生涯の伴侶と共に」、どうぞお聴きください。

ナレーション ^{かなぎ}金木での4か月間には、忘れられない悲しいこともありました。ドンと私は、いろんなグループの人たちに、一緒に聖書を学ぶように誘い、幾つかの聖書研究グループを作りました。その一つは、私たちが2階を教会としてお借りしていたお宅の階下の裁縫教室の若い女性たちでした。ある月曜の朝、彼女たちが教室に来ると、メンバーの一人が食器棚の中に倒れていました。彼女は睡眠薬を大量にのみ、自殺を図ったのです。その手の中にはこう書かれたメモが握られていました。

若い女性(三俣京子)「今、とても平穏です。私は少しずつ眠くなっていく。2階からは美しい賛美歌の歌声が聞こえます。私がこの世からさよならをするのに、なんてステキな状況でしょう…。」

ナレーション そのショッキングな出来事は、私を、日本という国が抱える”自殺美化”の風潮という悲しい事実、いやおうなしに直面させました。この国では、自殺は、生きる上での問題や、個人的な恥から逃れるための、光栄ある方法と考えられており、毎年3万人を超える人々が、自らの命を絶っているのです。この国には、古い武士の時代の榮譽ある切腹の伝統が、太平洋戦争中に多くの兵士たちを無謀な自決に追いやった戦陣訓、「生きて虜囚の辱めを受けず」の精神の中に、そして現代にも、国民性として生き残っているのではないかと思いました。でもそれは、榮譽でもなんでもなく、神様に与えられた命を粗末にすることです。神様がどんなにその人を愛しておられるかが分からないからそうするのです。私はその出来事から何週間かたったあと、その問題について説教で語りました。

スティーヴ 皆さん、私たちの命は、私たちのものではありません。それは神様のものです。自殺は、神様に反抗することとおんなじです。それは、自分に対する殺人罪です！

ナレーション 私はあとで、この説教が一人の人の命を救ったことを知りました。ある求道中の女性が、人生に疲れて、雪山に登って雪の中で凍結死しようとしたのですが、薄れゆく意識の中で、はっと私のメッセージを思い出したのだそうです。

スティーヴ (回想 エコー)「私たちの命は、神様のものです。…自殺は、自分に対する殺人罪です。」

ナレーション 彼女は、ふらふらする足取りで、雪の中から這い上がり、家にたどり着きました。彼女は、神様から与えられた命を、もう一度生きる道を選んだのでした。1955年の春、ドンは結婚して、ご夫婦で開拓伝道をするために北海道に去っていきました。一人残された私を、ミッションは五所川原に派遣しました。私のオーストラリア人の上司であるオズワルド・サンダーズは、それではせつかくの金木の開拓が無駄になってしまうと、本部に掛け合ってくれたのですが、本部の考えは変わりませんでした。金木の信者の方々は、そのあと大変な苦労をしたようですが、そこでの私の4か月足らずの小さな働きは、主に在って無駄ではありませんでした。それから5年後の1960年、五所川原教会は、最初の日本人牧師を迎えることになったのですが、その人こそ、あの金木の^{かくた}角田さんの個人伝道でクリスチャンになった川村耕哉さんその人だったのです。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション やがて私は、ちょうど両親がそうであったように、同じ宣教師として働く一人の女性を、生涯の伴侶として選ぶことになりました。でも私に一方的に“選ばれた”女性は、すぐには承諾してくれませんでした。アイルランド出身の彼女の名前は、エヴリン・ロビンソンといい、もうすでに日本語学校をやめていた軽井沢の代わりに、青森市で1年半ほど日本語を学んだあと、弘前教会で、OMF 宣教師として働いていました。私は、いわゆる“ひとめぼれ”で彼女に恋してしまい、かといって面と向かって打ち明ける勇気もなく、思い余って手紙で彼女に告白しました。でも教会で顔を合わせても、彼女は全く素っ気がありません。一日千秋の思いで待っていた私のところに、やっと彼女の返事の手紙が届きましたが、それは、いとも明快率直なものでした。

エヴリン(三俣京子)(最初、書いている感じから、話し口調に)「親愛なるスティーヴさん。お手紙感謝します。でも私は、今宣教師として、この弘前の人たちに主の福音を伝えることで頭がいっぱいで、結婚のことは考えられません。お断りしますので、あしからず。エヴリン。」

ナレーション でも私は、きれいにカールした赤茶色に輝く髪の毛の彼女の横顔を思い浮かべると、とても諦めきれず、3 か月後にもう一度手紙を書きました。でも、答えは、最初の時と全く同じくきっぱりした口調だったうえ、結びにはこう書いてあったのです。

エヴリン 「…ですからスティーヴ、このお話は、これきりにしてくださいね。エヴリン。」

ナレーション 私は何もかも忘れようと、仕事に没頭しました。それから 4 か月後、神様は“時は満ちた”と言わんばかりに、私たちの間に介入してくださいました。身も心も疲れ切った私は、気分転換をすべく、休暇を取って汽車に乗ったのですが、雪嵐で列車が立ち往生してしまい、やむなく私は弘前に引き返しました。私の顔を見た彼女は、驚いたことにこう言ったのです。

エヴリン スティーヴ！ 戻ったの？ うれしいわ！ ああ神様感謝します！

スティーヴン エヴリン、どうしたんだい？ 君はもう僕のことは少しも…。

エヴリン (さえぎって) 聞いて、スティーヴ。あなたが汽車でたった時、私、心の底ではあなたのことを真剣に考えてる自分に初めて気づいたの。それで祈って、神様にしるしを求めたのよ。

スティーヴン しるし？ どんな？

エヴリン 今日のこの日のうちに、もしあなたが私の家の玄関に立ったら、あなたと結婚しますって！

スティーヴン あ、ああ、エヴリン！

ナレーション それからほどなく結婚式を挙げた私たち二人の絆は、生涯破れることはありませんでした。私たちは夫婦として、また宣教の同労者として、1990 年に引退するまで 38 年の間、日本の各地で、キリストの教会を建て上げる喜びも苦しみも共に分かち合いました。妻は変わらず私を支えてくれ、その間、出産は命の危険が伴う体だったのに、信仰をもって 5 人の子どもを産み、立派に育て上げてくれました。私の今日あるは、全て彼女のおかげです。

音楽 (ブリッジ)

【ハンセン氏病保養園】

ナレーション ここで私は、妻と共に関わった、ハンセン氏病患者の方々の教会について、お話ししておかなければなりません。その施設は、青森市の西部、北八甲田山脈の麓にある「松岡保養園」で、700 人ほどのハンセン氏病患者が収容されていました。その患者の一人に、^{きち}吉さんという背の高いクリスチャンの男性がいました。彼は、太平洋戦争中、医薬品が極度に欠乏し、毎日のように患者たちが天国の希望もなく死んでいく姿を目の当たりにして、深く心を痛め、当時は敵性宗教で迫害を恐れてすっかりさびれていた園内の教会の復興のために、毎日、園のトウモロコシ畑に分け入って、断食して祈りました。そのうち 2 人の婦人の協力者を得た彼は、熱心に伝道し、数年を経て、教会は 100 人を超える信者であふれるようになっていたのです。その教会の存在を知った妻と私は、五所川原から、時間を見つけてはその保養園を訪れ、彼らと交わりました。妻はオルガにストとして、歓迎されました。そこで経験した忘れられない出来事を二、三、ご紹介しておきます。

最初は、いつもオルガにストを務めていた患者の若い女性です。彼女は地方

の裕福な家庭のお嬢さんでしたが、ハンセン氏病だと分かったと、家族によって保養園の門に置き去りにされたのです。わずかに残った両手合わせて3本の指と1本の親指で、彼女は力強くオルガンを弾き、礼拝の奉仕をしていました。そして吉さんです。彼は礼拝の時間になると、指のない手、髪の毛のない頭、もはや木の切り株のような足のまま両腕を挙げ、神を褒めたたえました。それからひざまずいて、大声で叫ぶのです。

吉さん(三俣雅通) ハレルヤ、ハレルヤ！ 父よ、感謝します。この病気を感謝します。この病気がなければ、私は決して救われることはありませんでした。ハレルヤ！

ナレーション それから、もう一人の若い女性のことも頭から離れることはありません。彼女はある日の礼拝で、こんな証し＝信仰の体験談をしてくれたのです。

若い女性②(中橋文) 私は校長の娘です。ある年に、町の“美の女王”に選ばれたのですが、冠をかぶせられて、会場を退場する時、嫉妬した他の候補者から、ボールに入った硫酸を頭からかけられました。私は東京の病院に運ばれ、何か月も治療をしましたが、醜く焼けただけの顔の半面を誰にも知られないため、見舞いの人にはいつもベッドの毛布で顔半分を隠したままでした。毎日死ぬことを考えていました。そんなとき、ラジオで初めて基督教の福音のメッセージを聴いたのです。それが、私に生きる勇気をくれました。

牧師(東) (マタイ5:8)「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから。」いいですか。外側の美しさは、しょせん表面の皮膚だけです。本当の美しさは、心の中にあるんですよ。

若い女性② 先生、私に新約聖書を買ってきてくださいませんか？ 読んでみたいんです。
牧師 いいですとも！ あなたにプレゼントしますよ。

ナレーション 熱心に聖書を読みだした彼女は、ほどなくイエス様をはっきりと救い主、主と信じました。それからあとの彼女の変わりようは、目をみはるばかりでした。他の患者たちを前に、力強い希望のメッセージを語る彼女は、もはや自分の醜い顔の半面を見せることを恐れませんでした。それだけではなく、彼女は青森に帰った時、自分に硫酸を浴びせた女性の家を訪ねて、こう言ったのです。

若い女性② あなたを憎んでないわよ。なぜって、あなたは私への悪意でそうしたんでしょうけど、神様は、それをよいことに変えてくださったんだもの。

ナレーション もう一つのお話しをして、私と妻の、松岡保養園の人々とのかけがえのない思い出のページを閉じたいと思います。それは、エヴリンが私たちの初めての子、長男のダニーを生んだ時のことでした。

エヴリン あなた、この子を園の人々に見てもらいましょうよ。無事に生まれるように、皆さんに祈っていただいたんだもの。

スティーヴ ああ。僕もそうしたいけど、君は、…その、ほんとに大丈夫なのか？

エヴリン もちろんよ。だって、あの人たち、赤ちゃんを見たことがないって言うんですも

の。

ナレーション 妻の言ったことは本当でした。それまでは、園の中で、赤ちゃんが生まれると、すぐに取り上げられて、園の外に出されましたし、誰も園に子どもを連れてくる人はいなかったのだそうです。私たちが、ダニーを連れて園を訪れた日のことを、私は生涯忘れないでしょう。彼らは、喜びのどよめきを挙げながら、私たち3人の周りに寄ってきました。すると妻は、一番そばにいた患者の女性に、ダニーを差し出したのです。

エヴリン さあ、抱いてやってくださる？

ナレーション その女性は思わず後ずさりしました。

保養園の女性(大橋) い、いけません。坊ちゃんを私なんかには…。

エヴリン 大丈夫よ。あなたにだっこしてほしいの。祈ってくださった皆さんの代表として。名前はダニーです。

ナレーション 彼女は、恐る恐るダニーを受け取ると、いとおしそうに、指のない丸い手首の両腕で、しっかりと自分の胸に抱きかかえました。

保養園の女性 ああ。…ああ、神様！（激しくおえつ）

ナレーション けれども園の人たちは、決して私たちから受ける一方ではありませんでした。毎年、新年の礼拝のあとで、彼らは私たちの働きのために、蓄えておいたお金をささげてくださったのです。またある年のクリスマスの日、集会から帰った私たちには、文字どおり1円も残っていませんでした。その時、郵便受けの一通の手紙に気づきました。

スティーヴ あ、保養園の教会からだ。何かな。（封筒を開けて中の紙片を取り出す音）郵便為替だ！

エヴリン もう銀行は閉まっていて、お金は下ろせないのに、これなら郵便局でお金に変えてもらえるわ！

スティーヴ おお主よ、感謝します！ 園の皆さん、ありがとう！

ナレーション それは、私たちが生涯で頂いたクリスマスプレゼントの中で、最もありがたい贈り物でした。

音楽 (ブリッジ)

【天幕伝道】

ナレーション 当時の私たちの大衆伝道のやり方は、専らテント伝道、日本式に言うと天幕伝道でした。1956年の弘前祭りでは、この集会を案内するため、1週間で実に45万枚のトラクトを市内くまなく配りました。日本人クリスチャンと宣教師たちの一大共同作業でした。私たちはテント屋さんから一番大きなテントを借りてきて、縁日でにぎわう川のそばにテントを建て、その中にベンチを並べ、私がハーモニカで何曲か吹く賛美歌をバッテリー式のスピーカーで流し、そのあとで講師が伝道メッセージを語るのです。テントの外にも人が集まってきたときには、テ

ントの両側を巻き上げて外からも聞こえるようにし、その人々にも素早くトラクトを配るのです。

この天幕伝道は、五所川原でも行われましたが、あの町での一番の思い出は、久末おばあちゃん一家のことです。彼女は、あの町で行われた1週間の天幕伝道の第1夜にやってきて、そこで信仰への招きに応じて真っ先に手を挙げて、前に出てきたのです。

久末おばあちゃん(大橋)先生、私はね、ずっと前から神様はいるに違いないと思ってたんですよ。

ステイーヴ ほう。それはどうしてですか？

久末おばあちゃん 太平洋戦争中、海軍で出征した長男が生きて帰れるようにずっと祈っていたんだけど、その息子が、周りに多くの戦死者の家族ができていく中で、無事で帰ってきたからよ。それだけじゃなく、息子の話を聞いて、ますますそれを強く感じたんです。

ステイーヴ そうですか。それはどんなお話ですか？

ナレーション そう聞かれて話してくれたおばあちゃんの話は、ほんとに驚くような話でした。

音楽 (ブリッジ)

久末おばあちゃんの息子(中尾)母さん。無事に帰りました。それも、三度も死にかけたのに。

おばあちゃん そうなのかい？ お前の無事を、毎日祈っていたんだよ。

息子 その祈りが聴かれたんだろう、きっと。僕の乗った輸送船が、マリアナ沖とミンダナオ沖で、2度も敵の潜水艦の魚雷攻撃で撃沈された時、板切れ1枚で海中を漂った末に、味方の駆逐艦に発見されて助かったんだ。

おばあちゃん おお、おお、そうだったの。よかったねえ。

息子 3度目はね、ラバウルの兵舎で、部屋に皿を取りに、食堂を出た時に敵の空襲の爆弾が食堂を直撃して、食堂にいた仲間はみんな死んだのに、僕は爆風で吹っ飛んだけど、かすり傷で済んだんだよ。

おばあちゃん まあ！ きっと神様のお守りだよ！

音楽 (ブリッジ回想終わり)

ナレーション それからも、彼女は毎晩やってきて熱心に話を聞き、何日目かの集会が終わった時、こんなことを話してくれました。

おばあちゃん 先生が最初の晩に聖書を開いて読んでくれた言葉が、私の胸にずっと入ってきたんですよ。あの「初めに神が、天と地を創造した」って言葉。

ステイーヴ ああ、聖書の一番初め、「創世記」の1章1節ですね。

おばあちゃん あれを聞いた瞬間、心の中で私の声が出たんです。「これ、これだよ！ この神が、目に見える全てのものの背後にいる神様なんだ」って。私はそれまで、太陽や月を見上げては祈ってた。道祖神とか神社に行くたびに祈ってた。でもこれら全てのものの背後に、生きた神様がいらっしゃるんだって。

ナレーション 天幕集会最後の夜には、その長男もやって来ました。きっとおばあちゃんが熱

心に勧めたんでしょう。集会の間中、一番後ろの席で、前の席の椅子の上に両足を伸ばし、せわしなくタバコを吸い続けていて、母親と違い、お世辞にも言い聞き手ではありませんでした。でもおばあちゃんは、なかなか教会には来られない自分の代わりに息子を礼拝に出させては、その話を聞いて自分の信仰の成長の糧にすると共に、熱心に息子に証し＝自分の信仰の体験談を話したのです。その“作戦”が功を奏して、まず息子、そして一人一人と彼女の家族は信仰に導かれ、ついには、20 人足らずの五所川原教会の会員中、13 人が彼女の親族で占められるまでになったのです。

天幕伝道については、もう一つお話しておきます。

それは、何十回となくやった天幕伝道の中でも、まるで最初からサタンに呪われたいたかと思われるほど、最悪のものでした。

効果音 (激しい雨)

日本人の牧師 ステパノ先生、この辺には大型テントを張れるだけの空き地がありませんよ。

スティーヴ そうですか。困りましたね。郊外に行けばあるでしょうが、それだと人が来ないし。

日本人の牧師 それにこの土砂降りの雨もひどい。まるでやむ気配がない。

ナレーション それでもなんとかテントぎりぎりの大きさの空き地を見つけ、集会を開いたのですが、なんとその集会の説教者が選んだテーマは、「死」についてでした。

日本人の牧師 皆さん、聖書は言っています。(ヘブル 9:27)「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」と。このままではいけません。聖書ははっきりとこうも言っている。(ローマ 6:23)「罪から来る報酬は死です！」

ナレーション その集会には、男子高校生の 5 人組が最初の夜から出席し、集会が終わっても残って、いろいろと質問をしました。全部の質問が答えられるまで帰らないのです。ところが明日は集会が終わるという前の晩のことでした。彼らの姿が誰一人見当たらないのです。私たちががっかりしながらそろそろテントをたたもうとしていた時でした。

男子高校生 (息を弾ませて)あ、あの、俺たちの仲間の肥田が…あの、一番体格のいいやつです。彼が…彼が…、さっき、死んでしまった。(泣き出す)

スティーヴ はい? どうして。いったい何があったんですか?

男子高校生 肥田は相撲部の横綱でした。彼は、今日の夕方、川で泳いでいて、医者は多分心臓まひだと言ってたけど、溺れて…。

日本人の牧師 信じられない…。

スティーヴ 残念です。彼はもう少しで信じることができたのに。

男子高校生 いや、彼ははっきり信じてました。そして、仲間みんなに、自分がクリスチャンになったことを分かってほしいと、四股名を「イエス・キリスト」とつけたんです。

日本人の牧師 そうだったのか…。それは、よかった。

ステイーヴ 君たちも、彼のような突然の“死”に対する、準備はできてるかな？ 彼の死を無駄にしちゃいけない。明日は最後の集会。4人でぜひ一緒にいらっしやい。

ナレーション これと似たような経験は、何度もしましたが、今お話ししたことは、本人の魂はすでに天国に移されていたという、まだ慰めのあるケースで、それ以外のほとんどは、伝道のチャンスを逃したまま、その人が突然の死を迎えたという悔やんでも悔やみきれない体験ばかりでした。私たちの一度限りの人生は、“死と隣り合わせ”の人生です。他の人に福音を語るために与えられたチャンスを、私たちは生かさなければならぬのです。

音楽 (ブリッジ)

ナレーション こうして、エヴリンと結婚してから最初の18年間、私たち二人は、長く一つ所にとどまることなく、日本の東北部を中心に、幾つかの教会に移動しながら、宣教の働きを続けました。1959年、私たちは五所川原を去り、オーストラリアとイギリスで報告休暇の時を過ごした後、帰国して今度は青森海岸の漁師町、鱒ヶ沢で2年間の伝道の日々を過ごしました。その町は、数え切れないような迷信に支配された町で、固まった家は多くても4軒ぐらいしかなく、次の集落には5キロも離れているようなところでしたので、教会に忠実な会衆を維持するのは困難でした。宣教師もまたしかりで、わずか4年間に、入れ代わり立ち代わり6人も変わったのです。私が赴任した時、ある教会員が言ったものです。

鱒ヶ沢教会員 (青森なまりで) 宣教師の名前を覚えても無駄だったよ。やっと覚えだ頃にはまた変わるんだもの。

ナレーション 鱒ヶ沢のあとは再び弘前でまた2年間、その次は、初めて本州を離れて日本最北の地、北海道の小樽の教会に赴任して、5年間牧会しました。1年間のイギリスでの報告休暇のあと、再び青森県の、今度は東海岸の八戸^{はちのへ}でした。

エヴリン 私たちの住んだ家、覚えてる？ 住み心地の良いイギリスから帰って、ちよつとしたカルチャーショックだったわ。隙間風の入る寂れた一軒家で、玄関を開けると、家の前の舗装してない泥道の前を、下水道が流れてたわね。

ナレーション そして次の任地は、19年前に、喜びに燃えて宣教活動をスタートした懐かしい青森市でした。1975年、そこでの第1期の働きを終え、イギリスでの報告休暇に帰りました。そこでは、私がエヴリンの間に与えられた5人の子どもたち、長男で17歳になっていたダニエを頭に、バス、フィリップ、ジョン、リズたちが、私もかつてそうであったように、イギリスの寄宿学校で学んでいました。遠く親元を離れて学ぶ思春期の彼らは、親がそばにいて受け止め支え、励ましてあげなければならない、不安定に揺れ動く精神的な問題を抱えていたのです。

エヴリン あなた、今日も親に言われたわ。少なくとも下の4人はまだ子供なんだから、彼らがもう少し大きくなるまで、少なくともあと2、3年は、彼らのもとにいるべきだって。

スティーヴン ああ、私の家族も同じ意見だ。ところが日本の OMF からは、宣教の仕事がまだまだあるから、我々だけで一刻も早く帰ってこいと言うんだ。正直、どうすればいいか分からないよ。

ナレーション 今なら、遠く海を隔てていても、e メールも、格安の国際電話もありますが、当時は連絡手段はもっぱら手紙、それも、早くて 1 週間、返事を書いてまた 1 週間かかるのです。そこから、子どもたちの教育の面でも、本部との仕事の面でも、意思の疎通がうまくいかず、それが時として大きな誤解や問題を引き起こしました。そんな中で、妻といろいろ話し合っ、しばらくイギリスにとどまろうと決心したのですが、その時に聞いた、ミルミード教会でのデイヴィッド・ポーソン師の日曜礼拝のメッセージが、まるで雷のように私の心に響いたのです。

デイヴィッド・ポーソン (説教) 預言者エレミヤは、民の応答が得られない中で、40 年間も召された仕事を続けたのです。もしあなたがひとたび宣教への神の召命を受けながら、今、辞めようと考えているなら、辞めてはいけません！ 神はあなたの味方です。ローマ 11 章 29 節にはこうある。「神の賜物と召命とは変わることがありません。」神は、ひとたび召されたら、それを撤回することは決してない。ひとたびご自身の恵みを施し、召そうとされた人へのお気持ちを变えることはないのです。

アナウンサー スティーヴと妻のエヴリンは、祈りの中で、このポーソン師の言葉を、自分たちへの神からの直接のメッセージと捉え、日本に帰って行ったのでした。今回は、いよいよ第4部完結編です。どうぞお楽しみに。

(第 3 部 完)